
放課後はラブゲーム

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後はラブゲーム

【Nコード】

N7375M

【作者名】

凧

【あらすじ】

少女マンガ好きのくせに恋をしたことのない葵。

夏休み直前にクラスメイトの藤代に告白されたことから、少しずつ変わっていく日常。

強引な藤代と、自分に自信が持てない葵。

少女マンガチックで、甘くてほのぼのして、ちょっぴり切ない恋の話。

短編「放課後のラブゲーム」の続編です。

a c t ・ 0 0 はじまりはここから（前書き）

短編「放課後のラブゲーマー」を加筆修正した話です。短編を読んだことのある方は飛ばして頂いても大丈夫です。

act・00 はじまりはここから

「付き合おうよ」

そいつが突然言い出した言葉で、おもわず指先に力が入った。パキン、となんとも小気味よい音を立ててシャーペンの芯が折れる。せつかく綺麗に書いていたのに妙なブレが出来てしまったのが悔しい。

7月12日 月曜日

天気 晴れときどき曇り

記録者 川島 藤代

つまりのところあたしが書いていたのは日誌だった。

週番の仕事の中で一番面倒なこれ。授業の教材運ぶとか、号令掛けるとか黒板消すとかはなんとかなるんだけど。

一言とか何書いたらいいのか分かんないし。

かと言って書かないとやり直しをくらってしまう。

とりあえず無難な言葉を連ねておこうと、ペンを走らせていた。

それが。

目の前の人物の所為で、

『体育があつて疲れましたが、楽しかったで』

と、なんとも間抜けな場所で中断させられてしまった。

でもよく見るとちよつと関西弁ぽいぞ。

うん、これはこれで愛嬌があつていいかもしれぬ。

シャーペンの芯が折れた跡も意外に魅力的に見えてくる。

「川島、俺の話聞いてた？」
「なんだっけ？天気の話？明日も晴れだったさ」
「なんだよー！仕方ないからもう一回言うぞ？」
「いいです聞きたくないですすみません嘔吐しました」

さらっと流そうとしたら、墓穴を掘った。
さっきのは空耳じゃなかったらしい。

おもわず息継ぎも無しに拒否しちゃったじゃないか。

当の本人は「ひっでー」と、笑う。

ホントはそう思ってないだろ、という突っ込みはあえてしないで
いた。面倒なことになりそうだし。

そもそも、どこからあんな言葉を引っ張り出してきたのか分から
ない。

確かに放課後の教室は、少女マンガが飛びつく絶好の告白スポット
だ。これは少女マンガ大好きあたしが言うんだから間違いない。

統計的に言って、体育館裏とか屋上とかに並ぶよね。

この際、さっきの言葉が告白かどうかすら謎だけどそれは置いてお
こう。ややこしいから。

とにかく、例えそうだとしてもあたしと藤代君の2人きりはそんな
甘いもんじゃない。週番としての2人きりなんだから。

大抵告白するまでには、なんらかの過程があるはずだ。友達だった
とか、一目惚れだったとか。

悪いけど、あたしと藤代君は「友達」ではない。単なるクラスメイ
ト。

一目惚れなんてもつての外。あたしは自分の容姿が十人並みだつて
知ってるし。特に真面目でも不真面目でもない。

それこそ一目惚れなんて言われたら、おもいつきり疑ってしまうか

鼻で笑う。

あたしとしてはそんな冗談言っていないで仕事をして欲しかった。

「藤代君、今日の生物なにやっただけ」

「あー…なんだっけ、メンタルの法則？」

「……メンデルね」

メンタルの法則とか、どうよそれ。

えんどう豆の遺伝子はメンタル面で決まるってか？
想像したら少し笑えた。

「ぼくうメンタル面が弱いので、色は黄色になりますー」ってもし
もじしてるえんどう豆が頭に浮かぶ。

…可愛いじゃないか。癒し系キャラで売り出したら、結構いい線い
きそつだ。

「や、そーじゃなくてさ。俺告白してんだけど」

パキン。

あ、また折れた。本日2回目。非常に勿体ない。シャーペンの芯だ
ってタダじゃないんだぞー

「おーい、川島あ？」

「藤代君さあ」

「お。やっそこっち向いた」

夕陽に照らされて藤代君の髪はオレンジに輝いていた。元々明るい色だから、余計に透けてキラキラしている。おもわず手を伸ばして触ってみたい衝動に駆られる。いや、そんなこと地球がひっくり返ってもしないけど。

藤代君という人物を、あたしは未だによく分かっていない。新学期が始まって随分経つというのに、彼について知ってることはあまりにも少なかった。

明るい茶色の髪の毛をしていること、友達がとても多いこと、女の子に大層おモテになるということ。

何組の誰々が告白したらしい、なんて噂はわざわざ聞かなくてもしよっちゅう耳に入ってくる。

そして本人には嬉しくないだろう告白の結果まで漏れなく付いてくるんだから、まったくプライバシーも何もあつたもんじゃない。

あたしは寧ろ好奇心よりも同情を覚えるよ。

まあ、そんな藤代君がだよ？彼の名前を出せば「ああ、アイツ？」って返ってくる藤代君がだよ？

普通も普通。金太郎飴のようにどこを切っても変わらないようなあたしを好きになりますか？

答えは果てしなくノーだ。あたしの場合名前を出されても大抵「誰？」で終わる。

あたしじゃなくたって貴方ならより取り見取りのハーレムでしょう。

「あたしの何処がいいのかまったく理解出来ないんだけど」

「そんな風に自分を卑下すんのはよくないぞー。よく見たら川島、

可愛いし」

…あーそうですか。

あたしは言つてやりたい。

よく見なくても、一目で可愛いと分かる女の子は腐るほどいると。
しかも貴方の周りに。

「川島さあ、ちっちゃいくせに一生懸命じゃん？」

「は？」

「委員会の仕事とか、放課後まで残つてやってんだろ。他の奴らなんかとつくに帰つてんのに」

誰も知らないと思つてた、あたしの仕事。

小さい頃から本が好きで、それが転じて万年図書委員。

貸し出しがこない間は好きだけ本が読めるのが何より嬉しかった。
まあ、月に一回ある本の整理が面倒だから常にじゃんけんで負けた
人になる「余りもの」ではあるんだけど。

だけど苦痛だつて思つたことはなかったし、委員会の仕事として当たり前前つて取つてた。

「実は俺、1年とき図書委員だつた」

「はっ？見たことないよ！」

「うん。毎回適当な言い訳付けてサボつてた」

「そう、なんだ」

「でも一回だけ見つかつて、残らされたことがあんだ。で、川島が

そこにいたと」

「そんなことあった？」

記憶を辿ってみてもどうも思い出せない。

こんな明るい髪の毛のインパクトある人、忘れないと思うんだけどなー

「…分かんない。ごめん」

「いいって。きつと気付かれてないな、とは思ってた。あの頃まだ髪も黒かったし」

まあとにかく、と藤代君の話は続いた。

夕陽は少しずつその姿を地平線に沈めていく。

辺りは段々と、紺色に包まれ藤代君の顔にも陰を落とした。

「俺はすっげー嫌々だったんだよ。元々本とか好きじゃないし」

「うん」

「なのに川島は一人で淡々と仕事しててさ、なんか驚いた。いい意味で」

「…うん」

「それから何回か図書館通ったりしたんだぞ、俺。知らないだろ」

「全然。気付かなかった」

「正直だな、お前」

ふっ、と頬を緩めて笑った藤代君に不覚にもちよっとどきっとして

しまった。

今更だけど女の子にモテるっていうことは、それだけ容姿も整ってるってことだよな。

いかんいかん。少女マンガを愛する者として王道の設定を忘れてたよ。

「そつから段々気になって、ラッキーなことに今年同じクラスになつて。それで席が隣になったとき、こりゃ運命だろって思った」

「う、運命!？」

「そ。俺あんまそつというの信じないタチだったんだけど、それ以外ないだろ」

「そつ…なんでしょうか」

運命なんて言われたの、生まれてこの方初めてのあたしは半ばパニックで藤代君の言葉を聞いていた。

こういうロマンチックな言葉は、いい男であればあるほど破壊力が凄いということに気付いた。

そしていい男が言つと全然違和感がないってことも。普通だったら笑つてるとこだよここ。

ときめく以前に心臓破裂寸前。

これ以上は、耐えられな…

「川島の一生懸命なとこ、少し天然なとこ、笑顔がすっげー可愛いとこ、全部好きだ」

爆発しました神様。

はつきり言って大爆発です。バーンっていつちやいました。顔が熱いです。熱が出てしまいそうです。辺りが暗くなってきたて本当によかった。顔が赤くなってるのはバレないだろう。

「くっ…顔真っ赤だし」

甘かった！ばつちりバレてたよ！
ていうか、笑うならおもいきり笑って下さい。
そんな押し殺したような笑い方されると、余計に恥ずかしい。

「ヤバイくらい可愛いな、お前」

ちゅ。

なんて、マンガだったらそんな可愛い効果音が付きそうなの。

「なっ…っ、あ、ええ！？」

おっおでこにキスされたー！
唇じゃないことが唯一の救いだ。
そんなことされた日にゃ、往復ビンタどこの話じゃなくなる。

藤代君が触れた場所が不可解に熱を持っていて、手で抑えずにはいられなかった。

心臓がそこに移ったみたい。どくどく血が上る。

「まー返事は急がないから。いいの、期待してる」

7月12日 月曜日

天気 晴れときどき曇り

記録者 川島 藤代

名前の所に薄く相合い傘なんて、古風なモノが書かれていたまま先生に提出されていたことをあたしが知るのは。

次の日先生にニヤニヤしながら「よかったな」なんて肩を叩かれてからだった。

誰が言い始めたんだか、「藤代君と付き合ってる」なんて噂のオプシヨン付きで。

波乱の学園生活とか恋の予感なんてどーでもいいから。
返して下さいあたしの平和。

「藤代君と付き合ってるってホント？」

今週何度目かの質問に、あたしは正直ウンザリしていた。と言つかあたし購買行きたいんだけど。目当てのチョコチップメロンパンなくなっちゃった。

目の前には今時の、可愛い女の子。オシャレに制服を着崩して、零れ落ちちゃうんじゃないかと思うほど大きな瞳を縁取る長い睫毛。生まれ変わったらこんな顔になりたいなあと場違いなことを思う。別に自分の顔が嫌いなわけじゃないけど。

とにかくドラマのヒロイン並みに可愛いその子は、あたしに向かってそんな言葉を言う。

よくて脇役、通行人Aが妥当だろうという顔のあたしに。

人の口に戸は立てられないとはよく言ったものだ、あたしはこの4日で身を以て知った。

4日前の放課後、藤代君から告白まがいのものをされてからあたしの日常は、日常じゃなくなった。

まず、見ず知らずの人から話しかけられる。特に美女。そして二言目にはみーんな同じ。「藤代君と付き合ってるの？」

結論から言って、付き合っていない。あたしは彼に返事を返していないのだから。

うん。なんて言うか：全力で逃げてきちゃった。

藤代君には大変失礼だと思ったけどいた仕方ない。だってあたしは異性に告白されることに免疫がないのだ。というか、初告白だったよ。

そんなんで頭が混乱しないわけがない。その時ばかりはオリンピック

クに出られるんじゃないかってくらいの早さで教室から逃げた。
あの後、藤代君は何にも言っておかなかった。だからホツとしていた
のが間違いか。

噂つてのは人から人へと伝う。それも電光石火の如く。4日で学校
中に広まったと言っても過言じゃない。

「ねえ、聞いてる？」

「あ、ごめんなさい。付き合っていないです」

「そう？やっぱり？そうだよね！」

同級生相手になぜか敬語を使うあたしと、さりげなく失礼なことを
言ったヒロイン女。

名前も知らない彼女は、「ごめんねーイキナリ」と反省の色皆無な
笑顔で去って行った。

「はあ」なんて間抜けな返事を返しながら思う。藤代君てやっぱり
モテるんだなあって。

今までもそう思わなかったことはない。

週に何回かは、女の子の間で話題に上がってたし。あたしの友達の
加奈子だって、藤代君の大ファンだ。（本人曰く、アイドルを追っ
かける気分らしい）

そんなアイドル様に告白された実感が今一つ湧かないのは決してあ
たしが鈍感だからじゃない。

あの日はドキドキして眠れないくらいだったけど、次の日になって
少し冷静になった頭で考えてみればやっぱり分らない。

藤代君の気持ち可疑うわけじゃない。あんなに真剣に告白されて嬉
しくなかったわけじゃない。

それでも心のどこかで自分を否定する気持ちがあるから、素直に喜

べないんだ。

藤代君に告白されて、鏡を見る回数が増えた。

年頃の女の子並みにはオシャレに興味もあるし、可愛くなりたいて思う。

けどそこにあるのは平凡で、一般的で、特徴のない顔。髪は黒いままだし、膝より少し上のスカートから伸びる足も美脚とは程遠い。彼の周りにいる女の子はみんな華やかで、可愛いとか綺麗って言葉がびったり当て嵌まる。

そういう光景ばかり目にしているからかな。こんなネガティブなものも、告白されたのが藤代君じゃなくて違う人だったら。あたしは少し考えても結局OKの返事を出すんだろうと思う。

隣に並んでも違和感を感じなくて、もっと自然に自分のこと評価出来て、素直に喜べたんだろう。

これじゃ完璧少女マンガのヒロインだ。

よくあるよね、こういうパターン。自分に自信なくせに、相手が超美形。

なんだかんだ言っても最後にはくつついちゃうんだよね。

それに素直に憧れてたあたしはなんて愚かだったんだ。ヒロインは陰でもっと苦労していたのかもしれない。あはは、もう笑えない。

溜め息を吐く度、こんな自分が嫌いになりそうだ。

「はい、今3回溜め息吐いたから3回分の幸せが逃げて行きました」

……し、心臓が止まるかと思った。マジで。
後ろから聞こえた声は、まさしく今渦中の人物、藤代君その人で。
左手に購買のビニール袋を提げ、右手をひらひらさせながら「よ！」
なんて笑う。
どうしてこの人はこんなに能天気なんだろう。こっちは今にも胃に
穴が開きそうなのに！

「あれ、機嫌悪い？眉間に皺寄ってる」

ここ、と長い人差し指が眉と眉の間を指す。

お前の所為だー！と言いたい気持ちを何とか喉のところで留め、代
わりに深く息を吸う。

ホントにこの歳で胃潰瘍になりそうだよあたしは。誰の所為でこん
なことになってんだか、この人は全然分かつちやいない。

自分は噂に慣れてるからいいかもしれないけどさ、あたしはこれまで
噂的とは無縁の生活を送ってきてるんだもん。

でもこの毒気のない笑顔見せられると、何て言うか…怒鳴る気も失
せる。

「…藤代君今からお昼？」

「そ。葵は？」

「今から購買行こうと思って。ってかなんで名前呼び捨て？」

「お！なんなら葵も俺の事、伊月って呼んでもいいぞ」

「無理無理無理無理。全力で遠慮する」

「ふーん。残念。ま、いつか」

何がいいんだ、何が。と思っただけどあえて無視。

これ以上付き合ってたら、また噂に火をつけそうだと判断したあたしはチョコチップメロンパンを買うべく一歩踏み出す。

「じゃああたし行くから」

「一つ言っと、なんか今日すげー激戦でさ。俺の次の次のそのまた次ぐらいの奴が最後だったんじゃないかね？」

「……………」

すごい分かりにくい言葉ではあったけれど、つまりのところ購買に行ってもパンはないってことだよな？

嗚呼、幻のチョコチップメロンパン。

あたしの足が後数秒だけ早かったら、もっと気づくのが早かったら…こんなことにはならなかった筈なのに。

ごめんよ。食べてあげられなくて。あたしは君が大好きなん…

きゅる。

「……………」

「……………ぶはっ」

お、お腹鳴ったし！！しかもきゅるって何！きゅるって！！！！

「わっ笑わないでよ！！生理現象じゃん！」
「わりっ…ぶっ…ダメ。もーダメ。葵サイコー！」

最高じゃなくていいからお腹抱えて笑うの止めてくれ。ひーひー言わないでくれ。

すれ違う生徒たちが何事かとあたしたちの方を見てるじゃん。

しかも何人かは藤代君とあたしに気づいて「あの噂の！」と隣の子とひそひそ話し始めるし。

…ホント勘弁してよー。

あたしの願いも虚しく、たっぷり1分近く笑った藤代君は手に持っていたビニール袋からパンを一つ取り出す。

「ほれ、可哀想な葵の為に俺の昼食分けてやるよ」

「え。いらない。友達に頼んで分けてもらおうし」

「んなつれないこと言うなって。特別にこれも付けるから」

そう言った藤代君があたしの前でゆらゆらと揺らすパンは…

「チョコチップメロンパン！！！」

「好きなんだろ？」

「好き！くれるの！？」

「おー、葵が俺と昼飯一緒に食ってくれるなら、な」

ええ、そうですね。このご時世ギブアンドテイク精神が基本ですよ。

もしかしてタダでくれちゃったりする？なんて甘い考えは箒で掃いてしまった方がいいですよ。

噂か、チョコチップメロンパンか。

普段のあたしなら迷わず断ってた。だけど今日は別。

午後の授業が始まるまであと30分。そしてあたしの腹の虫はもう限界だと言わんばかりにぎゅるぎゅる言ってる。

これは…究極の選択だ。このまま藤代君と一緒にお昼なんて食べたらそれこそ噂は拡張していく。

だがしかし。ここで断ったら確実にクラスメイトの前でお腹の大声を聞かせることになるだろう。それは何としても避けなくては目の前には愛してやまないチョコチップメロンパン。購買のってチョコチップがちょっと大きくて美味しいんだよね。

どうするあたし！どーすんの！

「…なーんてな」

「ふえ？」

「んな困った顔すんなって。からかって悪かったよ」

「かつ…」

からかったんかい！！

あたしの究極の30秒を返して欲しいわ！

一言言っただろうかと口を開くも、何かを突っ込まれ言葉は紡げなかった。

ほわっと口の中に広がる甘さ。まさにチョコとメロンパンのコラボレーション。

「あ…りがとう、ごぞいます」

「いーえ。じゃ」

「あ！お金！」

「いーって」

「そう言う訳にもいかないよ！150円だよね？」

行儀悪いと思いつつもチョコチップメロンを啜え、お財布の中を漁る。

何故か小銭入れの中は数枚の十円と一円があるだけだった。

…おかしい。確実に昨日200円入ってた筈なのに。

ああっ！！そうだ！今朝コンビニでジュース買ったんじゃん！！

あたしのバカ者め！！

お財布の中には千円札が二枚。これは可能性に賭けてみる？

「ごめん。大変申し訳ないんだけど千円札崩れる？」

「や、無理。俺も小銭無いんだわ」

「じゃあジュース買って崩すからちよつと待ってて！」

「ホントいーって。150円ぐらい」

「150円を馬鹿にする者は150円に泣くんだぞ！」

今のあたしみたいに！

そついう意味を込めて言ったら、またもや爆笑された。…なんだ、何がいけないんだ。

「ホンっと葵つておもしれーよな」

「意図して面白くしてる訳じゃないモン。藤代君が勝手に笑ってるんじゃない」

「いや、ある意味才能だぞ。面白くしてる訳じゃねーのに面白いて」

そんな才能欲しくない。マジで。

それ以上反論するのを諦めて自販機へお金を入れようとしたとき、「釣り切れ」の赤いランプが淡く光っている事に気付いた。

どうして…どーして！？どうしてこう悪い事って重なるんだ！ってか、なかなかないよ釣り切れ！

「はい、残念でしたね。葵ちゃん」

「…明日必ず持ってきます」

「明日土曜だけ。学校来るの？」

「じゃあ月曜！」

「まーそれでもいいんだけどさ。もっと簡単な解決策を取ろうよ」

「はあ？」

もっと簡単な解決策？

口の端を持ち上げて笑った藤代君は、なんて言うか…イタズラを思いついた子供みだった。

「明日俺とデートしよう。んで、葵が俺に150円分なんか奢ってくればそれでチャラ。どう？」

「どうも…どうしてそーなるのっ！？いや、いって！ホント月曜日必ず持つてくるから！」

「いやー楽しみだなあ、葵とデート」

「人の話聞けよ！ね？落ち着いて他の策を考えよう」

「無理。だって俺、葵のことすげー好きだもん」

「はあっ！？」

「じゃーそういうことで」

そういうことって…一体どういうことよ…！

…なんて、あたしの心の叫びも虚しく。

チヨコチップメロン片手に啞然と廊下に一人佇むあたしの姿は暫くの間噂になりそうだった。

じつとこちらを見つめる二つの目。

黒い髪に、平凡な容姿。大きな瞳も、長い睫毛も、すっと通った鼻筋も持たない。

数分間経ってもそれは変わらない事実だ。

「…はあ」

溜め息を吐くと幸せが逃げていくと言っけけれど、息を吸えば幸せは入ってくるのか。

いや、絶対違う。寧ろ息を吸おうが吐こうが逃げたって幸せは戻ってこない。

鏡から目を逸らし、もう一度大きく息を吐いた。

壁にかかっているカレンダーを何度見返しても、今日は土曜日。いつもだっただら嬉しい筈の休み。

なのにこんな憂鬱な理由は一つだ。

『明日俺とデートしよう』

あたしに告白をしてきたときと同じ顔で彼
った。

藤代君はそう言

デートってそんな軽いノリで誘えるものなのかと思っただけど、そこは藤代君だからって理由で納得がいく。

彼にとってはデートなんて朝ご飯食べるより簡単なことで、「コン

ビニでも行くかな」ってくらいのノリで行けちゃうものなんだ。ところがどっこい。あたしは違う。

生まれてこのかたデートなんてしたことないんだよ。ハッキリ行ってドラマとか、マンガとかで得られる知識ぐらいしかないんだよ。しかも必ずつて程、ちゅーイベントがあるデートしか知らない。…いや。無理だ。ホント無理。

デートってのはもっとドキドキわくわくするもんじゃないのか。ハッキリ言っであたしは墓場に行くような重い気持ちなんだけど。せめて一度でも彼氏がいたことがあれば、こんな感じじゃないと思うんだ。

だけどあたしにとって人生初のデートはよりによってあの藤代君。初めからレベル高すぎて超えられる気がしない。

もう一度鏡を見ても、いつもと同じ顔しか映らない。どっから魔法使いが現れて整形でもしてくれないかと現実逃避すらしたくなってきた。

…ホント、分かんない。

この数日何度も何度も考えた。藤代君があたしを好きになる理由を。答えが出る代わりに幾つもの疑問が頭を掠める。

図書委員の仕事を目にしてみたから、って理由で好きになれるものなの？あたし以外に委員会の仕事ちゃんとしてる子なんて山ほどいる。

その中でなんであたしなの？って。自分がこんなに否定的な人間だって初めて知った。5日前までは寧ろポジティブだと思ってたのに。

加奈子は言う。付き合っちゃえば？って。別に嫌いな訳じゃないんでしょ？相手はあの藤代君だよ？役得だと思いなさい、って。だけどそんな簡単なモノじゃないんだよ。あたしの心の中はぐちゃ

ぐちゃであれから一つも整理が付いてない。

例えば藤代君が告白したのが加奈子だったら、あたしはきっと同じことを言う。いーなあ。なんてからかって笑うだろう。

それは加奈子が可愛いって知ってるから。素直なところも、さらっさらの髪も、ちよっと勝気な瞳も。

残念ながらそのどれもあたしは持っていない。素直どころかひねくれてるし、髪は肩にやっとなり付くくらいだし。目だってどっちなかって言ったらタレ目だ。

こんな自分の容姿を否定することばを聞いたらお父さんもお母さんも嘆くだろうな。ごめん、親不孝な娘で。文句はクラスメイトの藤代君に言ってください。元凶はあの人です。

「…さつきから何ぶつぶつ言ってるの？キモいんだけど」

「う、わっ！驚かさないでよ、祐！」

「ノックしたし。返事ないから開けたまで」

祐こと、祐希は弟だ。一つしか歳が離れていない所為か、何かと生意気で何故かあたしよりしっかりしてる時がある。

中学の時はちゃっかり生徒副会長なんかやってたし、高校生になつた今は1年生ながらもテニス部のエースらしい。

お母さんなんかはどうしてこう、姉弟で出来が違うの？なんて冗談で言ってるけど、大いに同感だ。どうしてだ、弟よ。

きつとあたしが生まれる前に頭の良くなる細胞をお腹の中に置き忘れてきちゃったんだと勝手に思ってる。虚しいけど。

その祐希はあたしの部屋のドアに体を預け、訝しげな目でこっちを見る。

思春期だからなのか、あんまり話してくれなくなっただけどやっぱり

弟は可愛いもんだよね。その視線ですらほのぼのと受け流せる気がするよ。

…そう言えば祐希、中学の時彼女がいたような。ってことはデートしたことあるよね？

これは…使えるかも！

「あのさ、姉」

「祐希！！」

「なに！？」

「デートしたことあるでしょ？」

「はっ？」

「だからデート！ね、どういうことすればいいの？教えて！」

「はあ？意味分かんねーし。つか、デートすんの？」

「分かんないわよ！」

「なんでキレてんだよ！」

ああもう！話が通じない弟！

お姉ちゃんがピンチの時ぐらい助けてくれたっていいじゃん。あんなたが3歳の時、うっかりお皿割っちゃったの庇ってあげたのに！

「…どーでもいいけど、姉ちゃんに客」

「え？」

「藤代？って男が来てる」

「……………はいっ？」

「つか、すげーいい男じゃね？まさかとはおもっけど彼…どわっ！」

「なんでそういうことを早く言わないのよ馬鹿祐希！！」

「話聞かなかったのはそっちだろ！？」

祐希の怒鳴り声なんて耳に入らない。頭の中が真っ白だ。

そもそもどうして藤代君がうちにいるんだ。なんで住所知ってたんだ。そんなことより、大事なことが一つ。あたし、Tシャツにジーパンのままなんですけど。

よく考えたら「デートしよう」って言われたけど、時間も場所も指定がなかった。どうしてそこまで頭が回らなかったんだあたし！とにかくこのままでは下にいけないと判断し、まだ怒ってる祐希を部屋から追い出した。

開けっぱなしのクローゼットから一番手近な洋服を取り出し、身に付ける。この前加奈子と買い物に行ったのが幸か不幸か、夏らしいワンピースがそこにはあった。

薄手のカーディガンを手にとって、全速力で階段を駆け降りる。踏み外さなかったのは奇跡としか言いようがない。

階段を下りた先のリビングからお母さんの楽しそうな声に混じって聞こえる男の人の声。

急いで玄関を見ると、今時のオシャレな靴がきちんと揃えて並んでいた。

「藤代君!?!」

リビングのドアを勢いよく開けた瞬間、あたしを見る6つの目。

お母さん、祐希、それから…藤代君。

「お母」

「よー…じゃないでしょう。なんでうちにいるの?」

「いやー昨日さ、時間と場所決めるのに葵にメールしようと思った

「お母」

「思ったら？」

「俺、葵のアドレス知らないんだよなーって」

「……」

そーでした。

この5日間色々あったけれど、それまでは単なるクラスメイト。告白されてからも極力藤代君を避けていた所為もあって、ケータイのアドレスすら交換していなかったんだ。

だからどうしてそこまで頭が回らなかつたんだあたし…普通気付く
だろ。

自己嫌悪に頭を抱えなくなつたあたしと、どこか楽しそうにあたし
を見る藤代君。

その後ろのお母さんの顔なんて見たくも無かつた。どーせそれはそ
れは楽しそうな顔をしているんでしょうよ！

お父さんとはもかくとして、事あるごとに「彼氏はいないの？」な
んて聞いてくる母親だ。藤代君の登場はさぞ嬉しいに違いない。
娘の気持ちなんて知らないで。

「…ん？そういえばなんで住所知ってんの？」

アドレスも知らないのに、住所は知ってるっておかしくないか？

ああ、なんて藤代君は気のない返事をして、お母さんが勧めたグラ
スに手を伸ばす。

「斎藤に聞いた」

「斎藤…って加奈子!？」

「ん」

「なんで!？」

「なんでって…味方は多い方がいいじゃん？」

「み、かた…？」

「そ。城を落とすにはまず外堀からって言うじゃん」

絶句。

藤代伊月という男を、あたしは甘く見過ぎていたのかもしれない。いつの間に加奈子を味方に付けたんだろう。もちろんあたしは加奈子から何も聞いていない。

あたしの知らないところでどんどん協定が結ばれていく。きっと、お母さんもその一人だ。

だって…ほら、ニヤニヤしながらこつち見てるもん。

「因みにお母さんも藤代君の味方だからねー」

「ありがとうございます。これ、美味しいです。ごちそうさまでした」

「あらーいいのよ！藤代君みたいにカツコイイ男の子なら大歓迎！なんかアイドル見てる気分」

流石お母様。30を超えながらも某アイドルグループにきゅーきゅー言うだけの事はある。

つまりイケメン好きなんだ。祐希が小学生の頃は本気でオーディションを受けさせようと思っていたくらい。

まあ、祐希の全力拒否でそれはなくなっただけ。

ちら、と祐希に視線を送る。まさかアンタまでお姉ちゃんを裏切るつもりじゃないでしょうね…

だけど祐希の反応はあたしの予想とはちよつと違った。
興味なさそうにあたしたちの会話を聞いていたかと思つたら、藤代君のところへ歩み寄り、鋭い視線を向けたのだ。

「あんだ、ホントに姉ちゃんの事好きなの？」

「好きだよ」

「なんか信用できねー。あんだぐらいの顔持つてれば、姉ちゃんじゃなくてもいいんじゃないの？」

祐希…さりげなくぐさつとくること言ってるけど、まさしくあたしが言いたいことだよそれ！

やっぱりあたしの弟だわ…お姉ちゃん感動して涙が…

「祐希君、だっけ？」

「そーだけど」

「信用されてないんだつたら、信用してもらえよう努力しなきゃだよ」

「は？」

「つてことで葵、俺ちよつと祐希君と話してくるから。終わつたらデート行こう」

「え？は？ちよ…」

ボタン。なんて効果音付きでドアが閉まる。

祐希の腕を引いたまま藤代君は出ていってしまったのだ。つてか、え？

ちよ…まつ…ええ???

訳が分からなかったのはあたしだけじゃなさそうだ。取り残された

女2人で顔を見合わせる。

「まさか、殴り合い、とか？」

「あんたそれいつの三流ドラマ？2人ともそんな柄じゃないでしょう」

「…確かに」

「さて、と。とりあえず座って待ちましょう。コーヒー飲む？」

「え？いいよ。あたしのは」

「そ」

冷蔵庫からアイスコーヒーを取り出したお母さんは、あたしの向かいに座った。

カラン、と氷が涼しい音を立てて解けていく。コーヒーの苦い香りが部屋中に広がった。

ミルクを垂らすと段々と茶色に変化していくグラスの中の液体。人の気持ちみたいだ、なんて思ってしまったのはそれだけ自分の持っている気持ちが分からないから。

真っ黒だったコーヒーがミルクを入れることによって少しだけ優しい色になる。あたしという気持ちに、藤代君の言葉が入った時のように。

「彼」

「え？」

「藤代君。いい子じゃない」

「…うん」

「何か不満でもあるの？」

「不満っていうか…あたしの気持ちの問題」

「そう。どっちにしても返事をしないままっていいことじゃない」

やないわね。時間を置けば置くほど、藤代君は期待するでしょう?」

お母さんの言葉に、あたしは何も返せなかった。

このまま時間が経って、あたしに告白したことすら誤魔化せたらなんてズルイ気持ちを見透かされたみたいだ。

時間を置けば置くほど…きっとあたしは答えを出せなくなって、藤代君は戸惑う。

結局あたしは答えを出すことを恐れてる。藤代君の気持ちを否定する一方で、肯定してる部分もある。それがこの5日間。

それから会話はぶつりと途切れた。

考える時間が欲しかったのを、お母さんが察してくれたみたいに。

必死に頭の中を回転させて考えた。あたしは一体どんな答えを出したいのかと。

何分…何十分経っただろうか。

急に廊下が騒がしくなったかと思うと、ドアが開いた。

入ってきたのは祐希と藤代君。2人の間にさつきみたいな険悪な雰囲気はなく、祐希は頻りに藤代君に話しかけてた。

え。この数十分の間…一体何があったの? そんな意味を込めて藤代君を見ると得意げな笑顔が返ってきた。

「いやーマジですごいっすよ。藤代さん」

「あんなの凄いうちに入らないっす」

「そんなことないですって! 俺マジ尊敬しました」

「え、ねえ…何があったの?」

会話からも何にも分からなくておもわずそう問いかける。

藤代君ばかり見ていた祐希の目があたしに映った。その瞳の中はキラキラって表現が一番合うほど輝いている。

「聞いてよ。藤代さんってマジすげーの」

「だから何が？」

「ボスだよボス！俺何回やっても倒せなかったんだけどさー藤代さんは一発で倒したんだよ」

「…は？」

ボス…倒すって…

「いや、たまたまシリーズ全部持ってて、倒し方が分かってただけだよ」

「それでも一発でキメるってなかなかないっすよ！」

つまり。あれですか？

あたしが真剣にこの数十分悩んでいた間、男2人はゲームをしてたど？そういうこと？

さっきまでのシリアスな雰囲気はどこに行った！返せ！戻ってこい！！

そんなあたしの心の叫びを無視するかのように、まだ興奮冷めやらずといった祐希があたしの両手を掴む。

「姉ちゃん。俺藤代さんなら安心して姉ちゃんを任せられる」

「ゆーきー？」

「つてことで姉ちゃんをよろしくお願いします。藤代さん」

「もちろんだよ弟よ」

あ…あたしの将来はゲームのボス戦で決まるのか!!

「さて。弟の了解も得たことだし？デート行こうか」

恐るべし恋愛協定！

ああ。空が青いなあ。

夏の空ってなんか好きだ。青が綺麗。

気温はここ何十年かで最高を記録してるって、連日ニュースになっている。エアコンが効いた部屋の中にいるあたしにはあんまり実感のない言葉だったけど、こうして外を歩いてみればそう言う気もしないではない。

真上から照りつける太陽に極限まで熱せられたコンクリートは、じりじりと肌を焼いているみたいだった。

年ごとの女の子としては日焼けは避けたいところだけど、でも今日はなんか気分がいいし家に帰ってきちんとケアすればいいか。お風呂上りにパツクしながらアイスってのが最高なんだよね。

…なーんって。

現実逃避も甚だしいって？うん、あたしもそう思う。

この暑さでいつそ意識が飛んじゃえばいいなんて思っても、そうはいかない現実世界。

重い影を背負っているあたしとは裏腹に数歩先を歩く男は春真っ只中のようです。オプシヨンで花が見えそう。

そんなにあたしと出かけるのが(デートではない。断じて違う)嬉しいのか。

こんなこと、藤代君のファンかつこわらいに言ったら体育館裏に呼びだされてぼこぼこにされそうだけ。

「あーおーいー？」

「んー？」

「なんでそんな離れて歩いてんの。デートなんだから隣歩かなきゃ意味ないじゃん」

「あー大丈夫。ちゃんと見失わないように付いてくから」

「…そういう問題じゃないんだけど。しゃーない！ほれ」

差し出された手にあたしはポケットから取りだした飴を乗せる。

「サンキュ。…って違うから！！」

「おお、ナイス突っ込みだよ藤代君」

「俺の純情弄んで楽しいか！左手出せ、左手！」

「あたしの左手は今忙しくて出せませーん」

「なに幼稚園児みたいなこと言ってるんだよ。手ぐらい繋がせる」

ひい！何言ってるんだこの人は！！

純情を弄んでるのはどこのどいつだ！って誰か言ってやってください。

手ぐらいなんて言ってるけど、あたしには大事なんだから。

だって、ほら。強引に繋がれた手がまるで心臓になったみたいに脈打つ。

ドキドキすぎて熱射病になりそう。あれ、言ってること変？

兎にも角にも一瞬で周りの視線を攫った美形の男と平凡な女。これが美男美女だったら絵になるんだけどなあ。

ごめんなさい、通行人の皆さん。お目汚しで。

「う、わ」

「なに、ごめん。手汗ばんでる？」

「や、葵の手ちっちゃいなあ、と思いました」

「そつかなあ？でも小さいと不便だよ。体育の時バスケットボール持てないし」

「でも、それでいい。ちっちゃいままでいいよ」

「そう？」

「うん」

…なんだこの青春モードは！

藤代君が手の話なんかするから妙に意識しちゃったじゃんか！

あたしより二回りぐらい大きな手。あたしの手なんてすっぽり包まれてしまう。

うわ。ホントやばい。顔が熱すぎて火出そう。

藤代君の顔が見られなくて俯くしかなかった。

「あのさ、どっか涼しいところでも入らね？」

「え、あ。はいどうぞ！」

「ぶっ…相変わらずおもしれー反応」

「ひっどいなあ」

「まあまあ、機嫌直して。丁度時間もいいし映画でも見て涼むか」

「映画！？」

ぴたり、と足が止まる。

デートと言ったら映画なのか！そう言えば前に読んだマンガにもそういうシーンがあったような…

いや待て待て待てあたし！確かその映画デートは暗闇でちゅーイベントが

「なんか別なところがいい？」

「え！？いやっ…そういうわけじゃないんだけど。うん、見たい、見たいよ映画！」

「そ。お、いーのやってんじゃん」

携帯で映画の上映時間を調べてる藤代君の横で、あたしは不自然に首を振った。

考えすぎ。幾らなんでも有り得ない。そういう対象なのは美少女って決まってるんだから！

…駄目だ。いつもの余裕はどこへ行ったあたし。

藤代君に告白されてからなんか頭のネジ緩んじゃったんじゃないかと心配になる。

恋愛経験ゼロのちょー恋愛音痴なあたしが、デートなんて荒技に挑戦したのがそもそも間違いないのか。

何をどうしてどうしたらいいのか全然分かんない！

みんな初デートをどう無事に乗り越えてんのさ…

「葵？」

「え？ごめん、なに？」

「これ今やってる映画なんだけどさ、なんか見たいのある？」

「藤代君は何か見たいのなの？」

「すっげーグロいけどいいの？R15指定の脳みそとか飛び散るやつ」

「うっ…遠慮しとく」

「だろ？」

藤代君の口角が上がったのを見てからかわれてたんだと気付いた。

まあ、スプラッターなんて死んでもごめんだ。小学校の時に理科室に置いてあった人体模型すらまともに見られない。

高校生にもなってこういうこと言うのは恥ずかしいけれど、怖い映画とかテレビ見た日は夜中にトイレにいけなくなりそうだ。

弟の祐希はそういうの好きなんだよね。姉として信じられない。

藤代君の携帯を覗きこんで、どの映画がいいか見ていく。今は携帯で全部見れちゃうんだもん便利な世の中だよね、なんておばさんくさいことを思う。

普段映画館になんて滅多にいかないから、こういうことでもちよつと緊張しちゃうんだよね。

ふと、画面上に並ぶ文字に目が止まった。

CMで流れているのを見てからずっと気になってたタイトル。

元々は小説だったのを今回映画化したみたい。俳優さんも新人さんばかりだけど、ヒロインの女の子がほわほわしてて可愛いんだ。

「なに、それ見たい？」

「あ…でも恋愛映画だし、違っの選ぼうよ。アクションとかもあるよ」

「せっかく来たんなら見たいやつ見なきゃ損だろ。それに俺けっこう恋愛映画好き」

「え？そっなの！？」

「うん、葵は？」

「だ、大好き！！」

じゃ、決定。なんて藤代君は無邪気に笑う。

もしかしたら気をつかってくれたのかもしれない。ホントは恋愛映

画好きじゃないかもしれない。
だけど、正直嬉しかった。

再び繋がれた手と手は、さっきよりももっともっどきどきして。
けど嫌じゃなくて。

藤代君より数歩遅れて歩いてた足を少し早める。

それに気付いた彼が、あたしに合わせて歩調をゆっくりにしてくれたところは正真正銘の王子様みたいだった。顔がいい分誰も文句は言えないだろう。

初めて藤代君の私服を見たわけだけど、シンプルなのになぜか雑誌から抜けだしたみたいだ。

身長だつて高い方だし、明るい髪の色が端整な顔にまあよく似合うこと。

隣に彼氏がいるお姉さんだつて数秒は見つめずにはいられない男なんだ藤代君は。

うつつ…周りの視線が一斉に「えーあなた彼女ー？」って言うてるように感じるのは気の所為だろうか。

出来ることならば「私 彼女 違う」と書いたプラカードを持って歩きたいくらい。この際恥なんて殴り捨てよう。

例えるならそう、猫に小判、豚に真珠といったところ。自分で考えて悲しくなってくるけどさ。

藤代君に視線を移すも他人の目なんて気にしていないみたい。そりゃ気にし過ぎつてのもどろかと思うけど、ここまで見られて気にならないってことは慣れてるってこと。

あたしは藤代君に気付かれないうちにそつと溜め息を吐いた。

「わ、映画館久しぶり」

土曜日ということでも混んでるだろうなって予想は裏切られず、チケットを買ったまでに結構並んだ。

このままじゃ予定の時間に見られないかもと危惧したけどなんとか大丈夫だったようだ。

結局チケット代も、まさかの飲み物代も藤代君が出してくれて、男の人に奢って貰うという行為に慣れていないあたしはただただ挙動不審になるしかなかった。

あと一歩間違ってたなら警察来てたかも。

真ん中の列より2つ後ろの列は、あたしたちの他にも2組のカップルが仲よさげに座っている。

どっちも違和感のない普通の恋人。あたしと藤代君は多分違和感ありまくりだろうなんて思いながら藤代君に奢って貰ったオレンジジュースに口をつける。

「葵はあんまり映画館来ないの？」

「うーん。どっちかって言ったら家でDVD見る方が多いかな。気に入ったところ何回も見られるし」

「あ、それ分かるかも。でも映画館も迫力あっていいだろ？」

「うん。久しぶりだからわくわくしてるよ」

ふ、と藤代君の指先が頬に触れる。

まだ明るい映画館の中で真剣な二つの瞳があたしを射抜く。

「藤…」

「あ、そろそろ始まるな」

「そう、だね」

ビー、という映画館特有の音で視線が外されてホツとした。

変なことを想像した訳じゃないけれどなんとなく、気恥ずかしかったから。

段々と証明が落とされて、隣にいる藤代君の表情すら上手く読み取れなくなっていく。

映画を見るときの注意事項とか、映画予告がいくつか流れ、静かに本編が始まった。

それはとある都会から離れた田舎の出来事で。

主人公2人の、学生時代から話は始まる。同じ教室で、隣の席で。ただそれだけのことなのになんか気になって。

季節を重ねるだけ2人の距離は縮まって行くのに、言葉に出せないまま別れの日がやってくる。

東京の大学に行く男の子と、短大を出て田舎に残る女の子。それぞれの胸に淡い想いを残しながら。

やがて何年も時が過ぎ、毎日に忙殺されながらその想いすら2人は忘れていく。

お互い付き合ってる人がいて、だけどどこか満たされなくて。

そんなある日久しぶりに里帰りした男の人が、綺麗になった女の人に再会して昔の想いが甦る。

始終静かな音楽に包まれた恋の話は、綺麗としか表現しようがなかった。

途中何度もすれ違って、お互いを傷つける場面には溢れてくる涙を止められなかった。

ハンカチ、持ってた良かったと今日ほど思った日はない。
とにかく映画が終わる頃にはハンカチも使いものにならなくなってしまったのは言うまでも無い。

つまり、やられてしまったのだ、この映画に。

「へーき？」

「うん、ごべん」

映画が終わっても暫く涙が止まらなかったあたしを、藤代君は近くのカフェまで連れてってくれた。

きつと瞼腫れまくりでいつも以上に酷い顔をしてると思い、俯いたままオレンジジュースを注文する。

まだ鼻声が酷い。ごめんって言いたかったのに出てきたのはごべんだったし。

我ながらここまで泣くとは思わなかった。いや、普段から涙腺は弱い方なんだけどこんな風になるとは予想外だ。

きつと呆れられてるだろうなあ、なんて思ったのに予想外に藤代君は優しい顔してあたしを見てた。

「なに、か付いてる？」

「いや」

「ぶさいくな顔なんだから見ないですよ」

「全然。可愛いよ」

「ぶっ…!!」

おもわず運ばれて来たケーキに顔面を突っ込むところだった。

ジュース飲んだときじゃなくてよかったと心底思う。じゃなかったら藤代君のキレーな顔がオレンジジュースまみれになるとこだ。

「…そういうこと、あんまり言わない方がいいと思う」

「そういうことって？」

「だから！その、可愛い、とか」

「ホントのことなの？」

「そんなこと…」

あるわけないじゃん、って言葉は可愛いウエイトレスさんが藤代君の飲み物を運んできた所為で喉の奥で痞えた。

そんなことあるわけないよ。だって自分が一番よく知ってる。

その言葉が紡げなくて、ストローでオレンジジュースを掻き混ぜた。勢いで言えたら楽だったのに。

「映画楽しかった？」

「あ、うん！ありがとう。すごいわかった」

「どういたしまして。けど俺、どーも主人公の気持ちは最後まで理解できなかつたな」

「どうして？」

「好きなら好きって言っちゃえばよかったのにな。その後離れるよ
うな気持ちなんて、結局それっきりってことだったんだろ？」

藤代君の言葉にあたしは頷けなかった。

好きなら好きって、簡単に言えるものじゃないよ。

主人公の男の子も女の子も、それぞれにコンプレックスを抱いてた。

丁度今のあたしみたいに。
だからかな。痛いくらいに気持ちに同調出来たの。

簡単じゃないから、苦しいから恋なんじゃないかな？
そう思うのはあたしの勝手な想像でしかないのかな？

「葵？」

「…このケーキ美味しい」

「マジで？俺も頼もうかな」

「藤代君甘いのが好きなの？」

「そ。カッコつけてコーヒーとか飲んでるけど、実は超甘党」

笑った顔は歪じゃなかっただろうか。

ウェイトレスさんにケーキを追加注文してる藤代君を見ながら、そんなことをぼんやり考えた。

act·his·side ファーストデートのその後で(前書き)

藤代視点

短い上に、ただの惚気です(笑)

日中これでもかかってくらい上がった気温は、蝸の音が聞こえる頃には随分と落ち着いてきていた。

じっとしてれば汗をかくほどの暑さではあったけれど、そんな不快感も忘れるくらい俺は浮かれてる。

ホンの数分前、葵とデートした。記念すべき初デート。

緩む口元を必死で隠しながら、多分それも出来ていないんだろうけど、今日のことを思い出す。

映画見て、飯食って、キスもしなかったデートなのにこんなに嬉しいのは何故なんだろうか。

カッコつけて「手ぐらい」なんて言ったけど、ホントはすっげー緊張してたって言ったら葵は笑うだろうか。

繋いだ手の小ささとか、ちょっと高い体温も俺を幸せにするには充分過ぎる威力を持つてる。紳士的に玄関でまた月曜なんて別れたのに、本音を言えばその手、離したくなかった。

早く来い、月曜。日曜すっ飛ばして来ちまえ。

手に入れたばかりの葵のアドレスが、画面上に連なる。

葵らしいシンプルなアドレス。送れっこないのに、ずっと同じ画面のまま。

友達が聞いたら驚くような純情ぶりだ。俺自身だって驚くことばっか。

人並み以上に恋愛は経験したと思ってたのに、その「経験」は全く

役に立たない。

葵の友達とか、家族まで巻き込んで何やってんだって思ってる。だけれど葵がまだ、俺と付き合っつてことを躊躇ってるのを知ってるから。

だから少しぐらい強引な手は使わせてもらっことにした。

ホントはさ、余裕なんて全然ない。

自分が出した一言に葵がどんな表情を返すかすっげービビってる。

俺が今までしてきた恋愛ではこんなこと一度も無かったのに。

使ってきた言葉も、カツコつけた態度も役に立たない。今までそれで上手くいっつてたから余計に戸惑っつてばかり。

笑顔が見たいのに困った顔ばかりさせて、無理矢理取り付けたデートも内心、断られやしないかひやひやしてた。

未だに俺の気持ち疑ってる葵に、心の中全部見せてやりたいくらい。

俺ってこんなに純情で、ヘタレなんだって。

葵のこと好きになったきっかけは些細なものだったかもしれないけど、今じゃ言葉に出来ないくらい大きくなってんだ。

君を一つ知る度に、また君を好きになってく。昔聞いたありふれたラブソングに、今心から同調する。

やっべ。マジで少女マンガ思考じゃね？これ。

うん、でもさ。なんつーか悪くないよ、こっぴつ気持ち。

思い出す度に嬉しくなっつてさ、心臓の少し上辺りが疼いて、それからもう馬鹿みたいに幸せになる。

どん引きしそうな甘い台詞もその時ばかりは言えそうな気さえするんだ。

薄らと空に浮かんできた月に向かって一人思う。

俺たちきつと上手くいくな？

返事なんて返ってくる筈ないけど、

いつか俺の言う「好き」って言葉がちゃんと葵に伝わるまで、俺は
とことん片想いしてやるつもりだ。

a c t ・ 0 4 ガールズトークにご用心（前書き）

女の子は時として言いたい放題（笑）

act・04 ガールズトークにご用心

「で？」

興味津津と言った顔で、加奈子は机から身を乗り出す。

くるりと綺麗にカールされた睫毛が、瞬きする度ふるふると震えた。うわぁ、可愛い。

週明けの月曜日、まだちらほらとしか生徒がいない教室で机を合わせてガールズトーク。

まあ、昨日の夜加奈子から『明日7時半には学校来るよね？』っていうか来なさい』っていう脅迫めいたメールを貰った所為もあるんだけど。

お陰で土曜日の緊張から未だに解放されていないあたしは、欠伸を噛み殺しながら3回目の目覚ましで起きてここにいる訳だ。

こうなるって分かってたけど…案の定加奈子は土曜日の藤代君とあたしのデートの詳細を聞きたがった。住所を教えたことを初めに咎めれば「ごつめーん」だなんて全然反省の色のない返事が返ってきたけどさ。

根ほり葉ほり。それこそ1から10まで事細かに話しましたよ。ええ。だって加奈子の目がマジなんですもん。

話終わってカラカラになった喉をレモンティーで潤していると、加奈子がそう聞いてきた。

その目は期待にきらきら輝いて見えるのは気の所為？

「で、って…」

「だからその後よ、そ・の・あ・と！ホテル直行？」

「はあ!？」

「…は、流石に初心なアンタ相手にはやらないか。まあ、ちゅうぐらいはしたんでしょ？」

「は?え?しないしない!するわけないよ!ただ映画観に行っただけなのに!」

ぽかん、と加奈子の口が半開きになる。おうおうせつかくの可愛い顔が台無しだよ加奈子さん。

英語で言うところのぱーどん?ってやつか。あれだよ、もう一度言つてくださいな顔。

加奈子は消えそうな声で「信じらんない」って言った。

「今時初デートでちゅうなんて小学生でもするわよ」

「ええ!？」

「信じらんない!あの藤代君が!いくら葵が相手だからって…いや、相手が葵だからこそ大人の階段3段飛ばしで駆け上がりそうなのに!?ちゅうも無し!」

「あのー加奈子さん?何やら恐ろしい言葉が多々…」

「それとも自分好みにゆっくりじっくり時間をかけて染め上げてことうとか?うわー引くわー!」

「かーなーこー?」

完璧自分の世界に入ってしまった加奈子は無視して、メールを受信し始めたケータイを手取る。

時々あるんだよね。名付けて加奈子トリップ。こうなったら余程のことがない限りこっちの世界には戻ってこない。

というか今時の小学生…ちゅうするんだ。オネエサンついていけな

い。あたしが小学生の頃なんてそんなの大人の世界過ぎて、マンガの中に出てくるだけでもドキドキしたのにさ。

…嘘です。今でもドキドキしてます。ドラマとかでキスシーンが出てこようなものなら意味も無く目を逸らしちゃいます。

洋画なんて刺激が強すぎて見れたもんじゃないよ。

我ながらなんてピュアなんだと思うわ。ホント、みんなどんな顔してキスシーン見てるんだろう。

お気に入りのクマのキャラクターが教えてくれる、新着メール一件受信ボックスをグループごとや名前ごとに分けてる子は多いと思うけど、あたしはそんな面倒なことはしていない。つまり、誰からのメールでも一番上にある受信ボックスに収まるわけだ。

未だこつちの世界に戻ってこない加奈子に苦笑いしつつ、受信ボックスを開き並ぶ名前に固まった。いや、比喻ではなくマジで固まったんです。

「きゃ…きゃなこちゃん！」

「…あんたそれギャグで言ってるの？」

新しいあだ名は気に入らなかつたらしい。…ってそーじゃなくて！あたしは今さつき開いたばかりのケータイを加奈子に見せた。

「何、彼氏からのメールじゃん」

「彼氏じゃない彼氏じゃない！」

「まあ、なんでもいいけど。藤代君ならどんな手使ってもアンタをものにしそうだし」

「え…ちょ、親友を魔の手から守ろうなんて気は？」

「あはーないわ」

ないって言いきったよこの子！

加奈子はあれだ。子羊が食べられようが、赤ずきんちゃんが騙されようが、笑いながら狼に差し出す人間だ。

現に勝手に住所教えるとかいう前科もあるしね！

「で？藤代君何だつて？」

「も、もう家出ちゃった？つて…」

「あー…完璧一緒に登校しちゃおうとか考えてるね」

「ど、うしよう」

「はあ？どうしようも何もアンタもう学校にいるんだから無理って返事すればいいじゃん」

「そ、そっか。そうだよね」

呆れた顔で加奈子にそう言われ、いざケータイを持ってみるも…

まったくもつてどうすればいいか分からん。

いや、分かってる。ごめんね、もう学校にいるの。つて返信すればいいだけのこと。たった十数文字で済んじゃう話。

だけどその簡単なことがあたしにはどうも勇気が足りない。

そもそも男の子にメールなんて片手で数えるくらいしかしたことないんだよ。弟とか事務連絡とか。

レベルがいきなり高いです師匠…初めからラスボス対決とかマジでご勘弁下さい。

「か、加奈子お…」

「あーもう！じれったい！イライラする！あたしが返信するから貸してー！」

姐御！

もう今日から加奈子をそう呼ぼう。なんてたくましい友人を持ったんだあたしは。

ケータイをいじる加奈子を尊敬の眼差しで見つめる。分かる？この尊敬オーラ。キラキラビームだよ。

「はい」

「ありがと！なんて返信したの!？」

「電話。繋がってる」

ん？

「え…っと、加奈子、ちゃん？」

「ほら、早く取ってよ。手が痺れてきた」

「ちよっ…!」

なんじゃそりゃ！

って言う前に耳に強引に押し当てられたホワイトのケータイ電話。ええ、間違いなくあたしのケータイですよ。

『もしもし？葵？』

電話越しに聞こえる藤代君の声。

鼓膜を微かに震わせるその音は、心なしか弾んで聞こえた。なんて言ったら調子いいかな。

とにかく、藤代君と電話で話すのなんて初めてのことで。

ってというか電話番号を押したことすらなかったのに、いきなり会話そんなんで心臓の奴、ドキドキうるさいよ！なんて言える訳がない。…つまり緊張して心臓が口から出そうなんだけど。

恨みの籠った目を加奈子に向けても、彼女の視線はとっくにあたしから逸らされていた。

昨日発売されたばかりの雑誌を持って「いやん、やっぱりこの俳優

最高にカッコイイ！」と、意識はそっちに向いている。

どどどどどどうしろと!?

『もしもーし?あれ、電波悪いのかな。あーおーいー?』

「え、はいはい!ちゃんと聞こえています!」

『よかった。どーした?』

「へ?」

『あれ?なんか用があったから電話したんじゃないの?』

ああ!そうだ!そうだった!

「えっと…その、今学校にいて」

『あ、そーなの?つてことは一緒に登校は無理か』

「うん、悪いんだけど」

『でも何で電話?んなのメールすれば一瞬なのに』

ごもつともです藤代君!

だけどこればかりは加奈子の所為なのでなんとも言えない。
とりあえず笑って誤魔化した。

『ま、いつか。葵の声聞けたことだし、張り切ってチャリこぎます
かねー』

「…うん、頑張つて、下さい」

『おー。電話嬉しかった。サンキュ』

「あっ…」

ぷつん、と切れる言葉の糸。

藤代君の言葉に、顔中に熱が集中して弾けそうだ。

嬉しかった。

そう言った彼の声色は本当に嬉しそうで、電話してよかったのかも
しれない。

心臓は壊れそうな程鳴っていたけど。

「画面見ながらニヤニヤするの止めてもらえますかね、葵さん。ち
よっと気持ち悪い」

いつの間にか雑誌から視線を上げていた加奈子がそう言う。
口調とは裏腹に、すごく楽しそうに笑いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7375m/>

放課後はラブゲーム

2010年12月17日00時40分発行